

生活

隣の芝生

「隣の芝生はよくみえる」という俚諺りげんがある。実は隣の芝生ならずとも緑の原が見えると、そこへ行つて寝転んでみたくなる。ところが期待して行つた草原は、凸凹の地に雑草が群れ生えているだけの湿地で、鑑賞にはもちろん、腰を下ろす場所もないということがよくあるものである。

人類は類人猿からの発達過程で、よりよいものを求め、今やホモサピエンスの要求度は、隣の芝生は愚か、あろうはずもない完璧ささえ求めるようになった。しかし、これを求め続けているご本人の完成度とは見ていると、首を傾かしげたくなる場面も少なくはない。自己中心は物欲を伴つて加速し、刹那的でどう見ても羞恥心を忘れた動物の仲間としか云いようのない行動をとる人もいるからである。

これは子供などの幼稚性を指すのではなく、人生が完成に近づいている就実期を過ぎた人にも、見受けられる現象なのである。人生は難しく考えればこれほど複雑怪奇なものはない。しかし、図式的に整理をして考えると、これほど明解なものもないような気がする。

人は一億円の宝くじに連続百回当選するという、極めて低い確率の幸運を背負つてこの世に登場すると云われている。さらに、乳幼

児期の怪我、病氣。やがて学業の成績、青年期の反抗、就職、恋愛、結婚、二世の誕生、持ち家の新築、転勤の克服、孫への自分をなぞるような心配、そして、定年。振り返ればあつと云う間に人生の大半は過ぎ去り、ここまでの道のりをどうにか歩いて来た髪の毛の薄くなった二人は、身体の不具合を嘆き合うようになる。しかし、これが平凡なようで「人として」立派に歩いた人生の軌跡なのだと思う。この時期になって、隣の芝生を羨むようなことがあれば、人生の仕上げに失敗した人と言ってもいいであろう。

人生に百点満点はないと考えるのがよりよい答案である。しかし、百点を取ろうと努力しての六十点には、一見無駄と見える貴重な価値が含まれている。六十点はどんな試験でも合格点なのである。でも、六十点より高得点者がいるから六十点でも不合格者が生まれる。世の中はすべてを相対視するところから悲劇が生じる。人の不完全さは、狭い視野で他のものと比較することにあると断じて間違ってはいない。そこには揺らぎのない絶対はないし、そこからは正しい評価は出てくるはずもない。ましてや、掴み所のない世の中と自分を比べるなどは、全く意味を持たないと考えるのが至当である。私たちの今立っている芝生は、自分の選択肢から慎重に選び確信を持

って歩いて来た座標点なのである。貧富や境遇の差は時の社会情勢にもよるが主観的、感覚的なものから一步も抜け出るものではない。少々不器用でも真っ直ぐな生き方が、個性であり真価であると思うからである。それが体現され、日常の安心立命に繋がっているとすれば、それ以上の芝生はないと考えるべきであろう。結局は、隣の芝生がどうであろうと世の中のすべての芝生がどう繁ろうと、自分自身をどれだけ深く耕して置けるかが、人生で最も価値ある芝生作りになるのだ。

近年はニュースの最後に必ず世界の株価が報じられる。資本主義社会は、かつての西欧と後進国といわれて来たアジア諸国の位置づけに逆転現象を起こしつつある。さらに、石油産出国は、宝の山を持ち、大きな発言力を持ってきたが、かけがえのない宝物を失いつつある。それは、次世代を創るはずの若者が勤労意欲を失っているからだと言われている。豊かさの中で育った若者に国家の危機だからといった、にわかに勤労を強いてもモチベーションが生まれるはずはない。労働力を必要とする職場の離職率が九十五パーセントなのには驚かされる。転職先の希望はパソコンを主体としたデスクワークというからわが国の若者も他山の石としなければならぬだろ

う。これは化石燃料の枯渇よりも深刻な問題である。わが国もバブルの時代、若者の中には身体を動かすよりもスーツを着て高給の取れる職場を選んだ。しかし、格好よく見えたオフィスの中は戦場であつたのである。この時代公務員の希望者は減り、ご多分に漏れず教員の質も低下した。バブルが弾けてみると汗を流して身につけた職人の、その人にしか出来ない技が価値を持つようになった。実は芝生は足元にあつたのである。

世界の現状は、日本の原発事故を垣間見て、脱原発を目指して新しいエネルギーを模索しているのだ。人間の叡智はそれを可能にすると信じたい。日本人はそのことにいち早く気づき、我が身の身辺にある節約という資源にようやく気づいた。地球にやさしくと云いながら地下深くまで掘り、石炭、石油、天然ガスを掘り続ける愚をやめようではないか。地球の各地で起きる大地震も異常気象も、もしかしたら根っこは一つなのかも知れないのだ。

老子は「比較することによってのみ物事は見える」と云ったが、このことは真理なのだろうか、今の私には自然に逆らうことなく、他人を羨むことことなく、我が家の芝生が最も素晴らしいと思い続けることが、人生の達人だと考えている。